

山口剛著作集 第五



山口剛著作集 第五卷

定價三八〇〇圓

昭和四十七年六月五日印刷
昭和四十七年六月十五日發行

著者 山口 剛

發行者 山 越 豐

印刷者 白井倉之助

發行所 中央公論社

東京都中央區京橋二—一
電話(五六二) 五九二二
振替東京三四

目次

桃花扇傳奇 孔尚任

五

桃花扇傳奇解題

三六

譯毛詩國風數篇

三九

譯西廂記中歌詞

四〇

柳毅傳 李朝威

四二

長恨歌傳 陳鴻

四六

霍小玉傳 蔣防

四四

紅線傳 楊巨源

四六

漢武內傳 傅班固

四五

迷樓記 傳韓偓

奪錦樓 李漁

編集後記

四七二

四八四

五〇七

翻譯篇

桃花扇傳奇

序 齣 前口上 清朝、康熙甲子歲八月

年寄の司祭の官人、道士の服裝、白鬚をつけて出る。

老

曲骨董先生。何ぢやい。やくたいもない。俳優。死ぞこな

ひの。仲間なし。御當世衆の。もの笑ひ草。是非もなや。

曲うさもつらさも筆で消す。酒にはくほく。歌にいそいそ。

子供は孝行。お家來忠義。一切合切。結構づくめの。そ

の上長生せうとは。蟲がよや。

花さく春の、御治世の干支のはじめ、山には賊なく、地に居る者はみんな神仙。御めでたい事でござる。この
老耄奴。もと南京太常寺司祭の役人でおぢやつた。位はずんとの下賤、そこで姓名は態と申し上げませぬ。幸

に、つらい災難にもぶつからずに、九十七歳まで生きのび、國の盛衰興亡のあとを、見とどけ申した。またし
ても、今年は、御代の干支はじめ。帝はたふと、大臣は賢し、民は繁昌、五穀は豐饒。さればことし康熙の二
十三年には、十二くさの祥瑞を見申した。

幕の内にて、問ふ聲がする。

聲 もしもし、どんな祥瑞でおぢやつた。

老 (指を折つて) さればさ、黄河から龍圖が出る、洛陽から龜書が出る。景星明に、慶雲現はれ、甘雨はらはら、膏の雨がしと。鳳凰つどへば、麒麟も遊ぶ。それあの、堯の昔、階前に生えたと申す、莫莢の葉がぱつと開く。靈芝がぬつと生える。海には波がしづか、黄河の水は澄みわたる。めでたい事がずんと揃うてぢや。この老耄奴も、斯様な御代に出くはした嬉しさ。ただ、うかうかと遊びほうけてぢや。昨日、太平園で見ました新狂言桃花扇の儀は、明代の末年、まだ、この頃の南京の出来事でおぢやる。逢ふの、別れの、色の、戀の、話の筋合ひに、國の興亡盛衰の感慨悲憤もとり入れた事でおぢやる。事柄も、人物も、皆ほんの事の、據り所の、しやんとした事でおぢやる。やつがれ如きは、この耳で聞いたばかりか、この眼で、まざまざと見申した事でおぢやつた。それにまた嬉しい事がござるて。この老耄のよぼよぼ姿を舞臺の上にさらけ出し、狂言の端役な仕れとの事、一度は泣けい、一度は笑へ、一度は怒れ、一度はわめけとの儀。されば、斯様な事共申上ぐる此奴も、芝居の中の一役とは、何と、御客様方、御氣附きなさらぬで、ござらうて。

幕の内にて、問ふ聲。

聲 もしもし、その狂言は誰の作でござる。

老 御存じないか、皆様方。由來狂言作者は名をあらはに出さぬもの。なれども、作中に褒貶の筋の御座つて、春秋筆削のおもはくをそのままに、まつた、音律の正しいて、詩經教訓の心得を、そつくりと、とり入れましてぢや。

幕の内にて、問ふ聲。

聲 それぢや。てつきり、作者は云亭山人でござらうがな。

答 いかにも、仰の通り。

幕の内にての聲。

聲 今日このは殿方とのがたの御集あつまりぢやほどに、その狂言を致したい。おぬしは、昔人であり、それに新狂言も聴かれた事ぢや。筋立すだての前口上をお話しめされ。さあさあ、皆々様、お聴きなされませい。

老 張道士の「滿庭芳」の節ものがござるて。ひとつ歌つて、おきかせ申しませう。

曲こく 侯こうの若様。南京のかりや住み。南の國のたをやめと。馴

れて契りて。さかしら事に。さかれ。そがれて。本意ない別。天下の大事。江淮かうかいあたりのいくさ騒ぎ。愚おろかな帝をおし立てて。舞ひつ歌ひつ。遊び三昧。まこと禍は奸臣よりぞ起りける。

切れた縁えにが繋ながろかえな。樓うてなのうへのもの凄すごい。獄ひとやのつらさ。蘇そのぢいと柳りのをぢ。ようぞ救うてやりなされた。さても。さ夜中。帝みかどは逃れ。大臣おとどは走る。煙けぶりの波に身を投げた。忠義の御方のいたましさ。祭の庭に。桃花の扇はひきさかれ。迷の雲は晴れわたる。

内にて聲する。

聲 うまい、うまいぞ。けれど、調上手しらべじょうずにつり込まれて、筋が腹にずんと來ぬわ。もつと短くひつ括くくつていひめ

され。

老　さやうならば、

逆臣。馬阮ばげんのふたりは劍つるぎに倒れ。

柳蘇りゅうそは人知れず上手な絲をひき。

侯こうの若様は深い戀中。中さかれ。

張道士は國興亡くにきやうの筋をことわる。

やあ、まだいひ切らぬ中に、もう侯の若様の登場ぢや。皆々様、まづは御見物あらせられませう。

第一齣　講談聽聞の場　明朝、崇禎癸未二月

侯方域こうほういき（朝宗）、儒者の服裝にて出る。

侯

曲孫きょくそん楚樓そろうあたり。莫愁湖ばくしうこのほとり。幾もと柳。かげそへて。

風情ふうせいおもしろ。たそがれに。酒賣りて。人浮き立たせ。

たをやめは。南朝の化粧けはひをまなぶ。春にくるふ燕つばめ、鶯うぐいす。

國の大事をつゆ知らず。

曲庭靜か。廚はつめた。あなねぶた。南京に花見て。人の

老い行くや。朝の雨。城にそそいで。樹は枯れ。江かうに春

の潮しほよせて。殿の礎はくづる。ありし世の夢をいたみ。

今の世の歌をものす。旅の惱み。ふる郷の夢。おもひは

絲と亂る。水のべ近い里住み。今年はどこに宿ろ。あ

あ此のつばくらめ。

やつがれ、姓は侯、名は方域、字は朝宗と申す。中州歸德縣の生れ。名家の子孫ぢや。祖父は太常の官となられ、父は司徒の職に就かれた。やつがれ、東林の學黨に名をなし、江南にも、南京にも詩文の聞え高く、今また復社の盟友と相成つた。若い時分には、班固、宋玉に劣らぬほどの詞賦をものし、中年の今は韓愈、蘇軾ものかはの文章を作る事ぢや。耀華宮に鄰して住ひすれば、そこに文士のつどひ集つた昔にならうて、酒を讚美する詩を吟ずるにたよりよく、花の名所の洛陽も、ほど近ければ、何しに、千種を植ゑて、あたら年月をあだにすごさうぞ。去歲壬午の歲、南京禮部の試験に及第し得なんだあと、そのまゝに、この莫愁湖畔のかりずまひ。兵亂未だ靜まらずして、家路への音信もかなはぬうち、もう春ぢや。草のみどりは、やんがて、空に伸びようず。故郷へ歸る同伴も見あたらぬうちに、あの戰爭ぢや。たうとう、ひとり避難の身となつてしまつたわ。(嘆く)莫愁。名にし負ふ湖の、その莫愁に、わしをしてくれる工夫はないかしら。ほんにさうだ。社友の陳定生、吳次尾の御兩所は本屋の、蔡益所のもとに住んで居るが、いつも往來して、徒然を慰めるのぢや。今日も治城道院に、梅見の約束を致した。どれ、急いで參らう。

曲江にそふ郷。春のけしきととのひ。花のかけ、割子瓢も

たらず。笛の音ものうし旅のこころ。な行きそ。烏衣の

巷。むかしの主はあらずして。家のみは美し。

(入る)

陳貞慧（字は定生）、吳應箕（字は次尾）、儒者の服裝にて出る。

合 曲南京の勢衰へそめて。攻め鼓。旗さし物。今こそ見え

ね。やんがて。江を渡りて寄せ來らんず。

陳 やつがれは宜興縣の陳貞慧ぢや。

吳 やつがれは貴池縣の吳應箕ぢや。

陳（吳に向つて）時に、次尾殿、戰爭の様子を御ききなされたか。

吳 昨日の役所の報によると、賊軍がめちやに官軍を敗つて、段々と都に迫り、甯南侯左良玉はひきかへして、襄陽に陣をとつたさうな。中國に人物はない。もうだめだ。まあ、今のうち花でも見ておかうか。

合 曲ぬしはあらねど。春は來る。春は來る。雨に風に無慚や。

梨の花の朝けはひ。

侯方域、出る。互に見かはす事あり。

侯 やあ、御兩所、やはり、おいででしたな。

吳 お約束通りに。

陳 してまた、寺の掃除をさせたり、酒を買はせておきました。

小者、忙しさうに出て來る。

小 ひいやり寒いで、冷酒御免。花が綺麗で人出が多い。

まをし、旦那様、おいでが遅うございました。お歸りなさいませ。

陳 何。遅いとな。

小 徐達様の若様の梅見の御招待とやらで、寺中一杯の御客様でございます。

侯 それなら、秦淮の水樓へ參つて、美しいのに逢ふのも一興であらう。

吳 さう遠くまでゆかずともさ。御存じでございます。泰州の柳敬亭、あの吳橋の范大司馬、桐城の何老相國に褒めそやされた講釋上手が、ここに住んで居るさうです。これから、聴きに行きませう。春のうさ晴しといふ格で。

陳 それもよからう。

侯 (怒つて) その柳のあばた面奴は、近頃、魏忠賢の手下であるあの阮鬚面奴の食客になり居つたとやら。そんな奴の講釋はききたうない。

吳 ああ、まだ御存じなかつたのですな。あの阮鬚面は、やうやうおきてを免れたほどの奴。彼奴、いけしやあしやあと出しやばり居つて、歌唄ひを大勢集めて、貴族仲間に入出入する小づら憎さ。そこで、わたしは「留都亂を防ぐの檄」といふのを作つて、彼奴の罪を洗ひ立てました。で、はじめて、阮が、崔、魏一味の者だと知つた食客ども、その曲の濟まぬ中に、ぷりぷりして退散しました。柳あばたも、その一人ですからなあ。偉いぢやありませんか。

侯 (驚いて) ホホ、あの連中にも、そんなえら者がありますかな。ぢやあ、訪ねて見よう。

三人、一緒に出かける。

合 曲 仙人の洞あちこち。笙の音の。きこゆる近く。人は住む。

浮世の姿。ただ見守りて。

小 もう、ここが柳あばたの住ひでございます。聲をかけませうか。

(どなる) 柳あばたどの、お宅ですか。

陳 (叱りつける) これこれ。彼はな、世間にきこえた御仁ぢや。柳旦那と御呼び申せ。

小 柳旦那、御門をおあけ下さい。

柳敬亭、小さい帽子を冠り、廣い袖の禮服、白鬚をつけて出る。

柳 曲門閉ぢて。苔道はふかし。みやびをのとも。おとづれめさる。

柳 これはこれは陳、吳の御兩所、いやはや御出迎もいたしませんで、(侯に向つて) あなたはどなた様で御座りまする。

陳 これは私の友人、河南の侯朝宗殿、當今の名士でござる。かねて、お話を伺ひたいと申して居たが、今日、態々参りました。

柳 これはこれは、痛み入ります。どうぞ御坐り下さい。お茶を獻じませう。

皆々、坐る。

柳 皆様は學者衆、史記、通鑑はいかいお馴染、それなのに、今更老ぼれめの講釋を御ききあらうとは解せません。(指して) はれまあ。

曲 荒れた庭の。くづれ垣根の枯松。絲よりかくる春雨。草

かんばし。六朝代々の。うつりかはりの様のおぞまし。

鼓板のめたうち。涙まじりの講釋。女わらべの御機嫌と

ろまで。

侯 御遠慮あるな。さあ、お話を伺はう。

柳 折角のいでましに、遠慮は致しますまい。けれどさ、いつもの、譬女共の歌では、お耳にかなひさうもない。是非も御座らぬわ。皆様が御覧なさる論語の一章、あれをおきかせ申しませう。

侯 それは面白い。しかし、あの論語の講釋とは。

柳 (笑つて) 皆様がなさるのに、わしに出来ない事もござりますまい。兎に角、今日は論語をやつて見ませう。

席に就き、鼓板をたたき、講釋をはじめ。

われに問ふ、何事ぞ碧山に棲むと。笑つて答へず。心自ら間なり、桃花流水杳然として去る。別に天地の人間に非ざるあり。

たたき板でたたいて、

さて皆様方のお耳に入れる今日の講釋は、餘の儀でござらぬ。論語の一節、太師摯が齊にまゐつた全章ぢや。この一章の書は、魯の大夫、孟、叔、季の三家、僭越の罪を述べ、孔聖人、音楽を正すの功績をしるし申す事ぢや。折から周の皇室は東に遷り、魯の國の勢は衰へた事ぢや。ぢやによつて、三家は天子の禮式を真似て、食膳の徹する時、雍の樂を奏し、季氏はまた季氏で、天子八佾の舞を庭に舞はせるといふ體たらく。なんぼう、ひどい僭越では御座らぬか。所へ、わが孔夫子が、衛の國から魯の國へと歸られた。すると、音楽がどんと格式に合ふ様になつた事ぢや。あの樂官共はめいめいに、身の失策を恥ぢ入つて、あちこちへ散りゆきました。孔子様は、一體どれ程のお骨折をなされたぞ。それぢや。我が孔子様は、手に一本の筆、眼に幾種の書。さてこそ易經を纂めては、上は天時を律し、下は水土ををさめ、書經を修めては、堯舜を祖述し、文武を憲章せられましたぢや。禮記を訂正なされると、父子親あり、君臣義あり、長幼序あり、夫婦別ありといふ事になつて

ぢや。春秋を作られると、亂臣賊子懼おそをなし詩經を刪くられると、雅も頌も、すつくりと格に合ひました。別に苦勞もなさらいで、權勢の家々のざんざめいた劇場を、一寸の間にどしんとさせ、卽座にしゃんとさせられたぢや。痛快至極と申さうやら。さつても、聖人様の手段てだては、どえらいか、どえらうないか。素敵か、それとも素敵でおぢやらぬか。

鼓板をうちてうたふ。

曲むかしから。聖人の手くだの。いみじさは。風を呼び。

雨を喚よび。豆をまいて。つはものとする。一群の亂臣の。

禮に背いた歌や舞見れば。ちよとばかりの。ちよつかいで。さらさらと。押しかたづけ。下品のおひづかはれ者を。天晴男あつぱれにみがきたてなさる。

叩板で叩いて講釋する。

あの太師、名は摯しといふ者、まづ眞先に齊の國にいんだ。なぜ齊の國にいんだぞ。わしのいふのをお聴きなされ。

鼓板をたたいてうたふ。

曲お頭分の太師摯のいふ事にや。われ。なんでう三家景陽の鐘をならそ。さきには皆目かいもくもの見えす。泥にまみれたあだし身。今こそ清めて。おほどかに歩み行き。丑寅うしとらの方角。敬仲様に仲間入。わが名をば顯はさう。われはき